

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ポルトガル語の接続法3時称 : 形態・統語と意味の対応
Auther(s)	坂東, 照啓
Citation	ニダバ , 22 : 70 - 79
Issue Date	1993-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047242
Right	
Relation	



ポルトガル語の接続法 3 時称

一 形態 ・ 統 語 と 意 味 の 対 応 一

坂 東 照 啓

0. はじめに

法は、表現主体の個人的な判断を表わす文法範疇であり、ポルトガル語では直説法、接続法、命令法の 3つが認められている。一般には、直説法は、表現主体が事柄を客観的に表わす言語形式、接続法は表現主体が事柄を主観的に表わす言語形式、命令法は表現主体が事柄の実現を要求する言語形式と考えられている。こうしたポルトガル語の 3つの法は、動詞の屈折によって表示されるが、形態的に別の文法範疇である時制と常に融合して現れる。すなわち、直説法には現在、完了過去、未完了過去、大過去、未来、過去未来、接続法には現在、(半)過去、未来、命令法には現在といった時制が結び付く。このように、命令法を除く直説法と接続法は、複数の時制と組み合わせられる。

これまで、直説法の時称間については何等かの形で述べられることがあった。しかしながら、接続法の 3つの時称間については、あまり言及されることがなかったようである。そこで本稿では、ポルトガル語の接続法 3時称の体系について、その概略を述べてみたい。

1. 形態

まず、われわれは、接続法 3時称の形態を観察することから始めたい。第 1 規則活用動詞である falar「話す」、第 2 規則活用動詞である vender「売る」、第 3 規則活用動詞である partir「出発する」の接続法現在、接続法過去、接続法未来は次のような形式である(なお、枠内の活用形の人称は、上から 1人称単数、2人称単数、3人称単数、1人称複数、2人称複数、3人称複数の順)。

(1)	falar	vender	partir
接続法現在	fale	venda	parta
	fales	vendas	partas
	fale	venda	parta
	falemos	vendamos	partamos
	faleis	vendais	partais

	falem	vendam	partam
接続法過去	falasse	vendesse	partisse
	falasses	vendesses	partisses
	falasse	vendesse	partisse
	falássemos	vendêssemos	partíssemos
	falásseis	vendêsseis	partísseis
	falassem	vendessem	partissem
接続法未来	falar	vender	partir
	falares	venderes	partires
	falar	vender	partir
	falarmos	vendermos	partirmos
	falardes	venderdes	partirdes
	falarem	venderem	partirem

(1) から法・時制を示す形態を分析すると、接続法現在では第1規則活用動詞が {E} /é, i, ê/, 第2規則活用動詞が {A} /á, a, â/, 接続法過去は {SSE} /se, sê/, 接続法未来は {R} /R/である(ただし、{ } は形態素を表わす)。

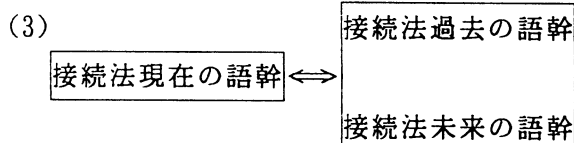
これに対し、強変化動詞の接続法3時称の形態はどうであろうか¹⁾。強変化動詞である *estar*「居る」、*fazer*「行う」、*pôr*「置く」、*vir*「来る」の接続法現在、接続法過去、接続法未来は次のような形式である。

(2)

	estar	fazer	pôr	vir
接続法現在	esteja	faça	ponha	venha
	estejas	faças	ponhas	venhas
	esteja	faça	ponha	venha
	estejamos	façamos	ponhamos	venhamos
	estejais	façais	ponhais	venhais
	estejam	façam	ponham	venham
接続法過去	estivesse	fizesse	pusesse	viesse
	estivesses	fizesse	pusesses	viesses
	estivesse	fizesse	pusesse	viesse
	estivêssemos	fizêssemos	pusêssemos	viêssemos
	estivêsseis	fizêsseis	pusêsseis	viêsseis
	estivessem	fizessem	pusessem	viessem
接続法未来	estiver	fizer	puscr	vier
	estiveres	fizeres	puscrs	vieres
	estiver	fizer	puser	vier

	estivermos	fizermos	pusermos	viermos
	estiverdes	fizerdes	puserdes	vierdes
	estiverem	fizerem	puserem	vierem

前の(1)に示した接続法 3 時称の形態には、何等かの指摘しうるような特徴を見出すことはできない。しかし、この(2)では、規則活用動詞（、及び準規則活用動詞）には見られない形態的特徴が観察される。それは、(2)に挙げた 4 つの動詞は、いずれも接続法過去と接続法未来が共通の語幹を有し、接続法現在の語幹と対立が認められるという点である。実際には、この特徴は *estar*, *fazer*, *pôr*, *vir* だけでなく、ポルトガル語におけるすべての強変化動詞に共通する特徴なのである。つまり、ポルトガル語において認められる強変化動詞（17 個）は、すべて接続法過去と接続法未来が共通の語幹を有し、接続法現在の語幹と対立を示すのである²⁾。



一体、この語幹の対立は恣意的なものなのであろうか。つまり、なぜ接続法過去の語幹と接続法未来の語幹は共通で、接続法現在の語幹とは対立しているのかということは説明されうるのであろうか。説明できなければ恣意的とみなされる。しかし、意味上も接続法過去と接続法未来には共通点があり、接続法現在とは相違点があるとすれば、この形態上の特徴は恣意的ではなく、動機付けられているということになる³⁾。この問いに答える手掛かりは、「接続法現在」、「接続法過去」、「接続法未来」という名称から得られるものではない。これらの時称の統語的・意味的な特徴を考察する必要がある。

2. 時を指示する機能

ポルトガル語では、文法範疇の法として直説法 (*indicativo*)、接続法 (*subjuntivo/conjuntivo*)、命令法 (*imperativo*) の 3 つが伝統的に認められている。このうち、直説法 (*indicativo*)、命令法 (*imperativo*) という名称はそれぞれの形式の意味に依拠している。しかし、接続法という用語は、「主節に接続する従属節に現れる」ということを表わしている。つまり、「接続法」とは、その形式が有する統語的特徴を捉えた名称なのである⁴⁾。実際、接続法 3 時称はいずれも多くの場合従属節に現れる。そのため、接続法の各時称について記述する場合、それ自身が指示する時間とともに、その接続法の形式が現れる従属節で表わされる事柄と、それに対する主節で表わされる事柄との時間的前後関係についても注目される。

2.1. 各時称が示す時間

2.1.1. 接続法現在

接続法現在は、その名称から現実の時間における現在時を示す形式と思われる。しかし、

実際には、この接続法現在には常に現在時を示すというわけではない。

(4) Sinto que eles não sejam meus professores.

<私は、彼らが私の先生でないことを残念に思う>

(5) É pena que você não se sinta bem hoje.

<あなたが今日気分が良くないことは残念です>

(6) Embora seja rico, ele trabalha muito.

<彼は金持ちであるにもかかわらず、よく働く>

(7) Espero que você venda sua casa por um bom preço.

<私は、あなたが家を良い値で売ることを望みます>

(8) É conveniente que você venha cá depois de amanhã.

<あなたが明後日ここへ来ることは都合がよい>

(9) Vou sair da sala antes que ele me veja.

<彼が私を見る前に、私は部屋から出るでしょう>

(4)－(6) では接続法現在がいずれも現在時を示していると言える。ところが、(7)－(9) における接続法現在、現在時を示しているというよりはむしろ未来時を指していると考えられる。つまり、(7) において接続法現在が用いられている従属節は、現在希望している (espero) 内容であるから、その内容自体は現在において実現しているわけではなく、未来時において実現するかもしれない事柄である。また、(8) においては、接続法現在が用いられている従属節に未来時を示す depois de amanhã という副詞句が現れているので、この従属節が未来の事柄を表わしていることは明らかである。同様に、(9) においても、主節は未来の事柄を表わすが、接続法未来が用いられている従属節は、その主節よりさらに未来の事柄を表わしている。

もっとも、直説法の場合には現在時制がいわゆる近い未来をも示しうることは、よく知られている事実である。

(10) Parto amanhã.

<明日私は出発します>

そのため、現在時制が未来時を示しうるという点については、接続法の場合においても直説法の場合と共通していると言える。しかし、ここで指摘しておかなければならないことは、(10) において、直説法現在形である parto を直説法未来形の partirei に言い換えても、この文の文法性に影響を与えないのに対して、(7)－(9) における接続法現在形の動詞を接続法未来形に言い換えるといずれも非文法的な文になってしまうということである。

(7') *Espero que você vender sua casa por um bom preço.

(8') *É conveniente que você vier cá depois de amanhã.

(9') *Vou sair da sala antes que ele me vir.

ただし、未来時の事柄を表わす節において、接続法現在と接続法未来の言い換えが可能であるような一部の例外もないわけではない⁵⁾。しかし、多くの場合この言い換えは(7')-(9')のように非文法的な文を生み出す。これに対し、未来時を示す直説法現在の場合には、直説法未来に言い換えることによって非文法的な文になるということはない。つまり、接続法現在は未来時をも示しうるが、接続法未来との関係においては、直説法の現在時制と未来時制の関係と全く並行的というわけではないのである。

上述のように、接続法現在は現在時だけでなく未来時をも示しうるが、さらに(4)-(9)を観察すると、接続法現在が現れている従属節が主節で表わされる事柄より後に生じる事柄を表わしていると解釈される例はない。つまり、(4)-(9)では、すべて主節が現在かあるいは未来の事柄を表わしており、従属節はそれと同時にあるいはそれに後続するような事柄を表わしているのである。実際、(11)、(12)のように主節の事柄に先行するような内容を示す従属節に接続法現在は用いられないのである。

(11) *Se o diretor me dê licença vou sair da aula mais cedo.

<もし校長が私に許可を与えれば、もっと早く教室を出るでしょう>

(12) *Depois que nós fechemos as janelas, trancaremos todas as portas.

<私たちは窓を閉めた後で、すべての戸にかんぬきをさすであろう>

従属節が主節の事柄に先行する内容を表わす(11)、(12)では、それがぞれ、*dê*の代わりに*der*あるいは*dá*、*fechemos*の代わりに*fecharmos*が文法的な形式として用いられる。従って、接続法現在は、時間指示上現在時か未来時を示すという特徴を持つことと共に、その接続法現在が用いられる従属節の内容と主節の内容との時間関係については、主節と従属節は同時の事柄か、従属節が主節の事柄より後に生じる事柄を表わすという特徴を持つことが指摘される。

2.1.2. 接続法過去

接続法過去も、その名称からは現実の時間における過去時を示す形式のように思われるが、これも接続法現在の場合と同様に、実際には過去時のみを示すというわけではない。

(13) Sinto muito que o senhor estivesse doente.

<私は、あなたが病気であったことを残念に思う>

(14) Se ela estivesse em casa ontem, eu iria vê-la.

<もし昨日彼女が家に居たならば、私は彼女に会いに行ったのだが>

(15) Nós faríamos uma viagem se tivéssemos dinheiro.

<私たちは、もしお金があれば旅行をするのだが>

(16) Eu faria isso amanhã, se pudesse.

<私は、もしできるならば明日それをするだろう>

(13)、(14)における接続法過去は過去時を示しているが、(15)における接続法過去

はいわゆる現在時での反実仮想を表わしていると解釈できるし、(16)における接続法過去は時間的に未来を指している。つまり、接続法過去は過去だけではなく、現在、未来をも示しうるのである。従って、接続法過去という名称において時制を表わしている「過去」という部分は、この形式が専ら過去を示すということではなく、過去をも示しうるということを表わしていると言える。

接続法過去は上で述べたような時間指示上の特徴を持つが、この時称が現れている従属節の内容と主節の内容との相対的な時間関係についても、接続法現在の場合と異なる特徴が見られる。つまり、接続法現在の場合、2.1 で述べたように、それが用いられる従属節は、主節と同時かあるいは後続する事柄を表わすのであり、主節の事柄より後に生じる事柄を表わすことがなかった。しかし、接続法過去の場合は、(13)のように主節の事柄に先行する事柄を表わす場合もある。このことから、接続法過去が、主節の動詞の時制に完全に依存せずに、独自に主節の事柄より「過去」を表わす能力があると考えられる。

2.1.3. 接続法未来

接続法未来は、これまでの接続法現在、接続法過去と異なり、その名称から予期される通り、多くの場合は現実の時間における未来時を示す。

(17) Quando eles abrirem esta caixa terão uma surpresa.

<彼らがこの箱を開けたとき驚くでしょう>

(18) Depois que eu vir o professor, falarei com você.

<私は先生に会った後であなたと話すでしょう>

(19) Se nós trabalharmos, teremos sucesso.

<もし私たちが働けば、成功するでしょう>

しかし、接続法未来が特に未来時を示してはいないと解釈される例も観察される。

(20) Quanto melhor for a qualidade de fazenda mais caro fica o casaco.

<布地の質が良くなればなるほど服は高くなる>

(20)において、接続法未来時制の従属節は、未来の事柄というより、現在の（、あるいは時間的な指示が特にされていない）事柄を表わしていると解釈される。従って、接続法未来は、未来時を示すことが多いとはいえ、未来時を絶対的に指示する形式ではないと考えられる。

ここでまた(17)－(20)の例を観察すると、接続法未来が用いられるすべての従属節は、主節が表わす事柄と同時か、あるいはそれに先行する事柄を表わしていることに気付く。それでは、主節の事柄に後続する事柄を表わす従属節において、接続法未来は用いられないのであろうか。

(21) *Até que você me chamar, fico em casa.

<私はあなたが呼ぶまで家に居ます>

(22) *Vou tomar uma decisão antes que for tarde demais.

<遅くなりすぎる前に私は決定を下すであろう>

(21), (22) では、主節の事柄は従属節の事柄より時間的に先行していると解釈されるが、この従属節に接続法未来時制は用いられない。(21), (22) の従属節は未来の事柄を表わすにもかかわらず、そこでは接続法現在時制が用いられ、それぞれ、chamar に代わって chame, for に代わって seja が文法的な動詞形である。つまり、未来時の事柄を表わす従属節に接続法が用いられる場合でも、接続法未来が用いられるとは限らないわけである。

2.2. 3時称の共通点と相違点

2.1 で見たように、接続法 3時称は、それぞれが現在時、過去時、未来時のうちの特定の時間を示すというのではなく、いずれも現在時、未来時を示しうる。また過去時についても、接続法過去のみが過去時を示すとすれば、この過去時を示しうるという点において接続法過去と他の 2時称は区別される。しかし、口語的ではあるが文脈によっては接続法未来も過去時を指すことができる。

(23) Quando eu chegar à estação, já partiu o trem.

<私が駅に着いたとき、列車はすでに出発していた(ただし、chegar は chegou が表す意味と認識的に同義であり、言い換えが可能である)>

このように、接続法 3時称が示す時間は流動性に富み、決して現在時制と現在の時間、過去時制と過去の時間、未来時制と未来の時間といったような時制と時間の対応関係はないのである⁶⁾。

しかし、接続法の形式が現れる従属節で表わされる事柄と、それに対する主節で表わされる事柄との時間的前後関係に注目した場合、接続法現在と接続法未来には対照的な特徴が観察される。すなわち、2.1, 2.3 で述べたように、主節が表わす事柄に後続する事柄を表わす従属節には接続法未来は用いられず、逆に、主節が表わす事柄に先行する事柄を表わす従属節には接続法現在是用いられないということである。

3. 統語的分布

前章では接続法 3時称が指示する時間について述べたが、本章ではこれらの時称が生起しうる統語的な位置について、独立文・名詞節、副詞節、形容詞節に分け、そこでの分布に注目してみたい。

3.1. 独立文・名詞節

単独の文、名詞節では、接続法現在、接続法過去は生起するが、接続法未来は生起することがない。

(24) Talvez seja isso exato.

<多分それは正確だろう>

(25) Talvez eu {parta/*partir} amanhã.

<たぶん私は明日出発するでしょう>

(26) Sinto que você não goste de música.

<私は、あなたが音楽を好まないことを残念に思う>

(27) Quero que você {parta/*partir} logo.

<私はあなたにすぐに出発してほしい>

(25), (27)のように、接続法が要求される独立文・名詞節が未来の内容を示す場合であっても、そこでは接続法現在が用いられ、接続法未来は用いられることはない⁷⁾。このことから、接続法現在と接続法未来は時間的な意味において対立しているのではないことがわかる。

3.2. 副詞節

副詞節においても接続法現在と接続法未来の分布に興味深い特徴が観察される。時間の前後関係を明確に示す複合接続詞 *antes que* 「～より前に」、*depois que* 「～より後に」、そして条件を表わす代表的な接続詞 *se* 「もし～ならば」に導かれる場合に注目すると、2.1, 2.3 でも見たように、*antes que* が導く節には接続法未来は生起せず、*depois que*, *se* が導く節には接続法現在が生起しない⁸⁾。

antes que と *depois que* は対照的な時間的意味を表わすと考えられるが、*se* の意味については、その統語的特徴と並行して、*depois que* と密接な関連を持っていると考えられる。というのは、まず、非過去の事柄が *depois que* に導かれる節で表わされる場合、その事柄は、主節が表わす事柄より時間的に先行する。同様に、非過去の事柄が *se* に導かれる節で表わされる場合、その事柄は、主節が表わす事柄に対する前提的内容を持つわけであるから、論理的に先行すると考えられる。つまり、いずれも発話者から見て、主節の事柄が起こるまでに位置付けられ、その主節で表わされる事柄が結果・帰結となるための要件とみなされる。このように、この *depois que* に導かれる副詞節は、時間的な面における条件を表わしており、*se* に導かれる副詞節が示す意味と類似していると言える。

3.3. 形容詞節

形容詞節については、定名詞(句)を先行詞とする場合と、不定名詞(句)を先行詞とする場合に分けると、前者には接続法現在が現れず、後者には接続法未来が現れないという制限が観察される⁹⁾。

(28) Ele vai trazer {um amigo/*o amigo} que nade bem.

<彼は上手に泳ぐ友達を連れてくるだろう>

(29) É preciso alguma coisa que nos {divirta/*divertir}.

<私たちを楽しませるようなことが必要です>

(30) Vocês podem levar todos os que {*queiram/quiserem}.

<あなたたちは好きなもの全部を持って行っていいです>

(31) Aquele que {*dê/der} informações sobre meu gato será bem gratificado.

＜私の猫についての情報を与える人は、よい報酬が与えられるだろう＞

定名詞（句）を先行詞とする形容詞節に接続法現在が現れず、不定名詞（句）を先行詞とする形容詞節に接続法未来が現れないということは、その先行詞と対応して、接続法現在是不定期的な意味を持ち、接続法未来は定期的な意味を持つと考えられる。このような特徴からも、接続法現在と接続法未来が、時間的な意味によって区別されるわけではないことがわかる。

4. 結論にかえて

以上、接続法の 3 時称についての基礎的な記述を行ってきた。その中でまずわれわれが指摘したことは、接続法の 3 時称が、形態論上、接続法現在と接続法過去・接続法未来に分けられるということである。この事実は明白なことではあるが、この形態的特徴が意味と関連があるのかという重要な問題をわれわれに投げかけている。次に述べたことは、接続法 3 時称が単純に時間的な意味において対立しているわけではないということである。確かに、接続法現在と接続法過去、接続法未来と接続法過去の間には、非過去対過去といったような時間的な意味における対立も観察される。しかし、接続法現在と接続法未来については、統語的分布が 3 章で見たようにかなりの部分において相補的あり、時間的な意味での対立は観察されない。

それでは、接続法 3 時称はどのような体系を成しているのだろうか。われわれは、接続法 3 時称には、心理的な「遠さ」という点において形態的特徴と対応した体系が認められるのではないかと考える。なぜなら、心理的に「遠い」意味を持つことによって、接続法過去は反実仮想を表現しうるのであり、接続法未来も未来の不確実な事柄を条件として示しうる、と考えられるからである。さらに、この心理的遠隔性の度合は、非現実を表わしうるという点から接続法過去の方が強いと言える。一方の接続法現在は、心理的に「近い」意味を持つので、現実性の低さを示すようなことはないわけである。

【注】

- 1) 強変化動詞とは、完了時制において規則活用のパラダイムから逸脱した変化をする動詞であり、弱変化動詞がこれと対立する。
- 2) 17 個の強変化動詞については、坂東（1991）を参照されたい。
- 3) 従来、言語研究では、言語の恣意的な面を比較的強調する傾向があったように思われる。しかし、言語が歴史の中で組み替えられ、あるいはまた維持されて今日の形で存在している背後には、その使用者である人間の認知的な作用が働いていると考えられる。認知的な営みがあるならば、言語には恣意的な面だけではなく、動機づけられている面

もあるはずである。

- 4) 接続法は叙想法とも呼ばれるが、これは直説法、命令法と並行した意味に基づく名称である。
- 5) logo que 「～するとすぐに」に導かれる副詞節では、接続法現在、接続法未来のいずれも用いられる。また、 caso 「～する場合」に導かれる副詞節において、ポルトガルのポルトガル語では接続法未来は用いられないが、ブラジルのポルトガル語では接続法未来も用いられる。
- 6) もっとも、文法範疇である時制が物理的な時間と直接対応するものではないということとはしばしば指摘されている通りである。しかし、条件を表わす節で接続法過去が現在の非現実を表わす場合などを見ても、時制は物理的な時間だけではなく主観的な時間とも直接には対応していない。
- 7) ただし、主節の動詞が完了過去、半過去、過去未来である場合、時制の一致によって接続法過去が用いられる。
- 8) ただし、接続法現在、接続法未来が生起しない副詞節を導く（複合）接続詞が、ここに挙げたものだけに限られるというわけではない。
- 9) 定名詞（句）、不定名詞（句）というように句に（ ）を付しているのは、制限的關係節の先行詞[D N] が、いわゆる名詞句(DP, determiner phrase)ではなく、関係節と姉妹関係にある D' と考えられるからである。

【参考文献】

- 坂東照啓. (1991): 「ポルトガル語の動詞に関する形態論的一研究」 *NEBULAE*, Vol. 15, pp. 20-36.
- Comrie, Bernard. (1987): *Tense*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Cunha, Celso. e Luís F. Lindley Cintra. (1985): *Nova Gramática do Português Contemporâneo*. Nova Fronteira, Rio de Janeiro.
- 黒川泰男. (1987): 『英文法再発見（下）』 三友社. 東京.
- 竹原如是. (1983): 「ポルトガル語における接続法」『京都外国語大学論叢』第XXIV号. pp. 237-252.
- 竹原如是. (1984): 「ポルトガル語における接続法（II）」『京都外国語大学論叢』第XXV号. pp. 310-331.
- 竹原如是. (1985): 「ポルトガル語における接続法 III」『京都外国語大学論叢』第XXVI号. pp. 251-268.
- Teyssier, Paul. (1989): *Manual de Língua Portuguesa*. Tradução de Margarida Chorão de Carvalho. Coimbra Editora, Coimbra.